

レイジーマン・コーヒー物語 その5

過去 100 年間のケシ栽培の流入、森林資源の乱開発、近代的農業の普及、主流社会からの偏見と政府による抑圧……。その激しい流れに押されて、衰退の一途をたどってきたカレン族の伝統農法「ク」。しかし、循環型の森林農業である「ク」は現在もまだ辛うじて存続し、むしろ近年の再評価の動きに支えられて、カレンの若い世代にも受け継がれるようになっている。200年以上にわたり、その伝統を守り続けているドイチャン・パペ村での取り組みからは、環境保全や復興への気運の高まりが伝わってくる。(文・辻 信一)

ドイチャン・パペ村を訪れる

2020年1月、ぼくと仲間たちは、スウェとオシの案内で、ドイチャン・パペ村へ向かった。その村では伝統的な循環型の森林農業である「ク」を守り、続行しているのだという。

ノンタオ村から2時間半ほど車で走っただろうか、広い車道から横道に入ったかと思うと、道はどんどんと狭く、悪く、急勾配になってゆく。あちこちで、道端の草むらが燃えている。前に焼かれて黒ずんでいる場所もあれば、時には道のほうにまで火がはみ出してきている場所さえあった。火の周りには人影がない。いったいこれはどういうことなのかと問うぼくに、オシは首を振りながら、吐き捨てるように、「クレージー！」と言う。

近年、平地で土地を失ったタイ人たちが山へと入植し、こうして危険な野焼きを繰り返すようになっていくのだ。それは農業のために手軽に雑草を処理すること、灰を即効性の肥料にすることを目的にしているらしいが、スウェとオシによれば、

それは全くの見当違いで、このやり方は森が培った豊かな土を劣化させ、風化させるばかりだ。生物多様性の破壊、山火事や空気汚染の原因にもなり、化学肥料や農業への依存も招く。現に、乾季が来る度に、チェンマイ市がスモッグに包まれて大問題となっている。しかし、それに対策を講じるべき政府自治体は、往々にして、タイ人入植者による野焼きとカレン族が何百年も行ってきた「ク」を、どちらも火を使用しているという一点で混同し、「部族民」「森の破壊者」という昔からの偏見に今もしがみついているのだという。

道端の野焼きの火と煙が醸し出す嫌な雰囲気振り払うように、ぼくたちを乗せたトラックは急坂をぐんぐん登ってゆく。ここはチェンマイ郡とランブー郡の間にまたがるドイチャン(象の山)という標高1420メートルの山の麓だ。パペ村と呼ばれる村は、その一つの峰に200年以上前につくられたという。スウェたちの説明によると、かつて、現在の大都市チェンマイを含む平野部にも広く定住していたカレン族は、次第に南から北へと進出してくるタイ人入植者に押されるよ

ライ地方でNPO職員として働いた後、故郷の村をカレン族の新時代を切り開くモデルとする夢を抱いて、ここに戻ってきたのだという。カレン文化の研究者であり、民族楽器を演奏する音楽家でもある。

ぼくたちはタイムスリップして、昔のカレン族の集落の中に立っているような気分になった。70世帯、270人が暮らすこの村は、200年以上にわたって都市文明から自らを隔て、隠れ里のように存在してきたのだという。他の村ではなかなか

か感じるこのできない落ち着きと美しさを感じられる。

外から押しつけられる強制的な変化を拒み、内発的な発展を選んできたからこそ培われた風格だろうか。標高はノンタオ村に近い1100メートル前後で、周囲の植生もよく似ているようだ。村のあちこちにあって、緑の葉が茂って、いかにも健康そうだが、実は、この村ですでにこのコーヒーを、チェンマイ地域でブランド化することに成功し、そこから重要な現金収入を得ているのだが、それについてはまた後で触れよう。デプヌは、村の外交官、スポーツスマンを自認している。彼が帰村するにあたって自らに課した使命は、彼が「ローテーション・ファームینگ」と英語で呼ぶ「ク」が軸となって展開するカレン村落の生活文化を、外の世界の人々に正しく理解してもらうための教育活動である。「外の世界」には

うに、森で覆われた山中へと後退した。これも、暴力的な衝突を避けて、自分の方から身をひくカレン族らしいやり方なのだという。カレンは昔から、戦わずに、逃げ、隠れるんですと多くの若き友人たちはいつもの穏やかな微笑みを浮かべて言った。

平地での長期にわたる生活のなごりだろう、カレン族の集落では、傾斜地での畑作「ク」に代表される伝統的な森林農業と、平地での有畜の水田耕作を組み合わせた農耕が長く並存してきた。しかし、20世紀も後半になると、多くの村がそのうちの半分である「ク」の部分を手放し、失うようになっていった。

前回書いたように、それにとって代わったのが麻葉のためのケシ栽培とその後の換金作物栽培だったのだ。ドイチャン・パペ村は、しかし、「ク」を手放さないまま、生き延びてきた。山深いとはいえ、グローバル都市チェンマイから車で一時間ほどで行けるような場所、なぜそれが可能だった



▲ 案内役は、カレン族の若きリーダーのひとり、デプヌ



▲ “隠れ里”ドイチャン・パペ村

単にカレン族以外の社会だけでなく、タイ社会に同化して文化的ルーツを失いかけているカレン人たちも含まれている。博物館ではなく、現に人々が生きているこの村に来てもらうことで、五感を通じてカレン文化に触れて、その土台に息づくエコジカルな知恵を感じとってもら

いたい。『森の破壊者カレン』という根強い偏見から抜け出して、むしろここに、今世界中に求められている持続可能な社会のための重要な教えを見出してほしい、とデプヌたちは願っているのだ。実際、ぼくにとっても学びの多い一日となった。

「ク」の畑を見学する

まずは、「ク」の仕組みについて、7年周期のローテーション（輪作）がどう進行するのかを、用意された写真のパネルを使って、レクチャーしてもらった。

その後、ぼくたちはデプヌとピダという二人の案内で実際のクの畑（「ローテーション・ファーム」）を見学する。ピダはデプヌの弟の義理の母親で、案内してくれるのは彼女の家族が昨シーズン作物を育て収穫した畑だ。

実際に立つてみると、畑は思っていた以上の急勾配だ。傾斜のせいでわかりにくい

▲「ク」の7年周期について説明するデプヌ（左）とスウェ（右）

4000平米）ほどだろうか。収穫が終わってから2ヶ月ほどだというが、そこに立つ切り株から出た枝が葉をまとい、すでに畑として使われたこの土地が、また森へと還るプロセスに入っていることがわかる。下草も根を張って、土壌の流出を抑えている様子だ。

「ク」で栽培する作物のなかで、その主役は、村の主食である陸稲だ。稲だけで100種以上が今も栽培されている。その他に、豆類、とうもろこし、野菜類、胡麻、唐辛子、花、



▲「ク」を案内してくれるデプヌとピダ

など40〜50種の作物を育てる。また「ク」とハチの相性はとてもよい。ハチが「ク」を支え、「ク」がハチを支える。養蜂も伝統的な森の農業に欠かせない要素だ。

畑の周囲を見回すと、ぼくたち見学者には、どこも普通の森林に見えるのだが、村の人々にとっては、隣の森とこの畑は別々のものではない。今ぼくたちが立っているこの畑も、これから7年休んだのちには、隣の森のような姿になる。場所によっては7年以上、休ませる場合もある。

収穫などの大がかりな作業は、集落によってはコミュニティ全体が出て働くこともあるが、この村ではだいたい家族単位で農作業を行なっているという。「ク」に関しては「所有」の概念はなく、ある家族が作物を育てているあいだは「その人たちの場所」であることを誰もが知っているが、その一年が過ぎればその土地はもう誰のものでもない。カレンにとって、「ク」の土地は霊的で神聖なものだ。半年余りのあいだ、特定の土地を「借りる」、そして「預かる」という感覚に近いようだ。

「ク」の畑にする土地を選ぶにあたって、よい場所か、ほどほどか、悪い場所かを予測するのだが、それはさまざまな自然界や精霊からのサインを感じとりながら行われる。

まず、エリアの区画を決め、伝統的な作法によって、それを指定する表示をする。この選定の作業のあいだに、カメの声やイノシシの声が聞こえたら、その土地はあきらめる。その年はやめておいた方がいいという標（しるし）だから。特にカメはパワフルな生きものとして知られる。他にも、自分たちが使っているナイフが壊れたり、夢のお告げがあったりして、その土地を断念することもある。これらはすべて、精霊たちが送ってくるメッセージだ。そもそも人間は精霊たちの許可を得て、大地を使わせてもらっているということ忘れてはいけない。

畑の場所が決まったら、開墾を始める。木々を伐る際、残したい木は膝よりも高い位置で伐ることによって、木が枯れずに再生するようにする。



▲ 焼けて黒ずんだ切り株から枝葉が出ている

次に火入れを行なう。4月初旬から半ばにかけて、雨季の直前がよい。必要以上に燃え広がらないように、念入りに準備する。火が燃えている時間は長くても1時間を越えない。そうすれば、草木の根茎はダメージを受けず、土が劣化したり、雨で流出することもない。灰が肥料となって収量をあげるといふ一時的な効果と引き換えに、土地を傷めたり、森の再生能力を損なったりしないことが、カレンにとっては重要なのだ。平均15歳以

下の樹木は二酸化炭素を活発に吸収し続け、健全な土壌は炭素を地中に固着する高い能力をもつことも今では科学的に知られている。その意味でも、「ク」は環境保全型の森林農業だといえるだろう。

偏見と差別を乗り越えて

ぼくたちがデプヌたちと見学した収穫後の畑には、あちこちに手づくりの祠（ほこら）が立っていた。栽培シーズンを通じて周到にとり行われてきた儀礼の跡だという。儀礼にはいくつかの種類がある。例えば、全ての作物がよく育つようにと祈る儀礼タテモー、悪霊を祓うためのタセ、火の精霊に感謝するタルメイ、害虫などの災害からの保護を願うタカカイなどである。

村には牛、水牛、豚、鶏、犬などの家畜が人間とともに暮らしている。家畜たちは休耕中の土地には自由に出入りできるが、作物が育っている最中の畑には、柵



▲◀ 畑の中で儀礼が行われた祠の跡

祠を建てて儀礼の準備(カレン族の他の村)▼▶



村人たちが「ク」によるローテーション農業を行なっているあたりの土地にも、たくさんの野生動物が棲んでいる。しかし、それとは別に、野生動物だけが生きる領域として、ここよりもさらに上、標高の高い水源地帯の鬱蒼とした森林が、コミュニティによって保護されている。にもかかわらず、タイ政府はその区別ができない、とデプ又たちはあきれたというように首をふった。「ク」が行われる森と、動物たちのテリトリーとして森とを区別することができず、「ク」焼畑Ⅱ森林破壊」として弾圧しようとしてきた。近年、学者や研究者たちのあいだでは理解が進んだとはいえ、政府や役人の古い偏見はなかなか変わらないのだという。

タイばかりでなく、「焼畑Ⅱ環境破壊」という思い込みは世界中に行き渡り、先住民に対する偏見の一因にもなっている。だからこそ、デプ又のような若い世代の先住民にとって、伝統農法における火の使用の意味を正しく伝えることが重要な課題になっているのだ。すでに触れたように、火入れは、乾季の終わりごろ、雨季の直前に行われる

習慣だった。しかし現在、大気汚染や山火事などの問題に直面した政府はタイ人入植者による破壊的な野焼きや焼畑に対して全国で規制をかけており、そのあおりで、カレンが昔ながらの火入れを、最適な時期に行なうことが、ますます難しくなってきた。乾季が終わるまでは火をつけてはいけない、というわけだが、それでは伝統的なやり方はできないことになる。ここでも、政府は、全く意味の異なる二つの農法を区別することなく、「焼畑」という名のもとに一緒にたにしてしまっているのだ。

(次号:その6へつづく)

レイジーマンコーヒー 農薬・化学肥料不使用(タイ産)

● 中深煎り
150g



口当たりは優しく、豊かなコクと甘味があり、ほのかに柔らかい酸味があります。後味にも甘さが長く続きます。

▶地図で防火プロジェクトを説明してくれるデプ又



▶収穫後の畑にもまだまだ食べ物がある

